法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

「言う」の機能語化・イディオム化と表記

玄, 宜青 / Xuan, Yiqing

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化. 論文編 / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
107
(終了ページ / End Page)
115
(発行年 / Year)
2012-04
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007857

Hosei University Repository

「言う」の機能語化・イディオム化と表記

玄　宜青
XUAN YIQING

1　はじめに

本稿は、日本語における漢字、かな表記の棲み分け、使い分けについての調査研究の一環として、主として動詞「言う」と、その関連語句についての表記に関し、コーパスデータほかを用いて調査するものである。

動詞「いう」は、常用漢字表に「言」の訓として掲載されている動詞である。ただし問題なのは、常用漢字表に掲載されている語は、必ずしも漢字で書かなければならないというルールはなく、実際に、漢字で表記されない場合もある、という点である。常用漢字表の主眼は国民の平均的なリテラシーを超えた難解な漢字を公的な場では用いるべきでないという漢字制限的な性格にあり、実際に本稿で扱う「いう」は、仮に本動詞用法であっても相当数のひらがな表記比率を持つ。

このような事実を踏まえると、以下のような論点が成立すると思われる。

（1）　同じように常用漢字表記内の語であっても、語によって漢字 / かな表記の書き分け比率（以下、「漢字 / かな表記率」と略記）が異なることが予想される。語ごとの比率実態を明らかにするとともに、比率の大小を左右する要因を探る必要がある。

（2）　語彙的要素（「いう」であれば本動詞の「いう」）が機能語化・イディオム化する（「いう」であれば繋辞「という」やイディオムの「い

Hosei University Repository

わば」等になる）ことにより、漢字表記をせずにひらがな表記にする頻度が高くなることが知られている。この場合でも、それぞれの派生機能語・イディオムが全く同じような漢字 / かな表記率になることは考えにくく、それぞれの派生機能語・イディオムごとの漢字 / かな表記率の実態を調査し、その要因を探る必要がある。

（3） 広義のリテラシーを考えた場合、ある条件のもとである語を表記する際に、漢字表記をするほうが普通なのかかな表記をするほうが普通なのか、ということを知っておくことはリテラシーとしても意味がある。辞書等には時折、常用漢字表記内の語であっても「かな表記が普通」「かなで書くことも多い」などの注記がなされることがあり、上記のリテラシーを支える情報としての意味を持つが、コーパスデータ上の裏付けは、現在のところ十分ではなさそうである。本稿のような興味からの調査は、将来的にこのような問題に対しても一定の意味を持つ。

2　調査概要

以上のような論点において、わずかな一端ではあるが知見を与えるため、以下のような調査を行った。

調査語：

主として動詞「いう」と、そこから派生される機能語（繋辞「という」等）、イディオム（「いわば」「とはいえ」等）。また、比較のための周辺語句として動詞「なる」「聞く」などの（単独）動詞、「いいきる」などの複合動詞についても調査を行った。　対象コーパス：

『新潮文庫の 100 冊』のうちの、日本人作家分。外国作品の翻訳部分については、今回の問題においては文法事項等ほどに対象の均質性を損なうことはないと見られるが、念のため

Hosei University Repository

除外した（今後翻訳部分について別途調査し、日本人作家分と比較することにも一定の意味があると思われる）。今回調査においてはひとまず方針を「（文学的文章であるというぐらいの）ある程度の文体的均質性があること」「表記について、（法律条文のような）強い統一基準を用いている可能性が低いこと」として上記のコーパスを選んだ。いずれにせよ、どのようなコーパスを選ぶかについては、明らかに目的に適さないものを除けばいずれも一長一短であり、徐々に対象の量と種類を増やしていくしかない性質の事案である。

調査手順：

⑴対象コーパスのうち、該当語句について漢字表記かかな表記かを調べ単純にカウントした。「いう」とその関連語句については、常用漢字外の「謂」「云」等の漢字表記は除外した。その他の語についても、常用漢字外の漢字表記、および、（常用漢字内であっても）常用漢字音訓内の表記に該当しない漢字表記（「想（おも）う」等）は同様に除外した。

⑵調査の主眼が、語や用法ごとの漢字 / かな表記率にあるため、対象コーパスにおける該当の用例数が大きくなりすぎる場合には、活用形等を絞った一部抽出調査にしてある。一部調査にしてある場合には、それぞれの結果表示箇所で、どのような形の一部抽出調査にしたかを示す。

以下、それぞれの調査の結果について、３、４で示す。

3　本動詞「いう」の表記とその周辺

3-1　本動詞「いう」の表記比率

まず、「いう」等の、本動詞の漢字 / かな表記率を調査した。動詞「いう」は該当用例数も多い上、機能語化している用法との境界が微妙な

Hosei University Repository

用例をできるだけ排除するため、「引用符（カギカッコ）をとっている」「言い切りである（従属節中でない）」という基準で用例を一部抽出してカウントした。また、「いう」以外の語についても同様の理由で、「言い切りである」「格成分をとっている」という条件のもとに一部抽出をおこなってカウントした。従ってそれぞれの用例の絶対数にはほぼ意味はなく、本稿においては漢字表記数とかな表記数との比、すなわち、漢字 / かな表記率のみが意味を持っていることを重ねて確認しておく。具体的な調査語彙は、「いう」「なる」「きく」「みる」「かんがえる」「おもう」である。

調査結果は下記、〈表 1〉のようになった。漢字 / かな表記率は、表中の b ／ (a ＋ b)、すなわち、かな表記用例数 ÷（漢字表記用例数＋かな表記用例数）なので、数値が高いほどかな表記の率が高いということになる。

〈表 1〉

語	漢字表記		かな表記 用例数 (b)	漢字 / かな表記率 b ／ (a ＋ b)
	字	用例数 (a)		
いう	言	238	221	0.481
なる	成	29	2231	0.987
きく	聞	133	78	0.370
みる	見	740	147	0.166
かんがえる	考	520	2	0.003
おもう	思	2473	218	0.081

少ない語数であるが、この〈表 1〉からだけでも、常用漢字表記内の語であっても、漢字 / かな表記率が多様であることが見て取れる。「なる」のかな表記率が 99％近く、「かんがえる」のかな表記率が 1％以下と、同じ常用漢字内表記の動詞であっても、極めて大きな差となっている。主な検討の対象である「いう」は、表中では「なる」に次

Hosei University Repository

いでかな表記率が高い。常用漢字で表記可能な動詞のかな表記率が5割を超えることは、少数の語を除き少なそうである（あくまで予想であり、厳密にはすべての動詞について調査する必要がある。）が、「いう」のかな表記率は5割にかなり近いところにあり、本動詞の「いう」をかなで表記することへの抵抗・違和感がないことが推察される。少なくとも、「かんがえる」をかな表記してある際には何らかの意図・背景を感じ取られやすいのに比べ、「いう」がかな表記してあることによって同様の意図・背景の含意を生じることは少ない、という種のことは言えると思われる。

3-2 「いう」を前項に含む複合動詞の表記

同じ「いう」であっても、複合動詞の前項に現れる場合、漢字 / かな表記率が異なるようである。調査結果を以下の〈表2〉に示す。調査語彙は、「いいあらわす」「いいかえす」「いいきる」「いいきかせる」「いいつくす」「いいつける」「いいよる」である。表記について、複合動詞後項が漢字で表記されているか、かなで表記されるかについては区別しなかった。

概ね、複合動詞前項における「いう」（「いい」）は、本動詞用法における場合よりも、かな表記率が低い、ということが見て取れる。この結果は日常的な直感と矛盾するわけではないが、複合動詞前項という、派生形式の場合のほうがかな表記率が低い（漢字表記率が高い）という事実は簡単には説明が付かない。従って理由については今後の検討課題とするが、日本語の表記傾向の一つとして興味深い。

Hosei University Repository

〈表２〉

語	漢字表記 用例数 (a)	かな表記 用例数 (b)	漢字 / かな表記率 b ／ (a ＋ b)
いいあらわす （言い表す）	48	9	0.159
いいかえす （言い返す）	71	6	0.078
いいきかせる （言い聞かせる）	319	124	0.280
いいきる （言い切る）	165	28	0.145
いいつくす （言い尽くす）	13	8	0.381
いいつける （言いつける）	34	21	0.382
いいよる （言い寄る）	29	2	0.065
「いいあらわす〜いいよる」の計	679	198	0.226
cf.　いう	238	221	0.481

4　「いう」から派生した機能語・イディオムの表記

３と同じコーパスを対象に、ここでは「いう」から派生した機能語・イディオムの表記について調査した。対象となる語句は、「という（繋辞）」「ということだ」「というものだ」「というのは（接続詞的用法）」「とはいえ（接続詞的用法）」「かといえば（接続助詞的用法）」「かというと（接続助詞的用法）」「なんという（ex.「なんという美しさだ」）」「いわば」「いうまでもない」「いわんばかり」の 10 語である。繋辞の

Hosei University Repository

「という」については用例数が大きくなりすぎるため、後続の名詞が「動き」「つもり」「こと」「考え」「意見」「話」である場合に絞るかたちの一部抽出調査とした（後続の名詞が「こと」のケースについては、「ということだ」の形は除外してある）。そのためここでも調査結果で意味を持つものは、主として漢字 / かな表記率のみである。調査結果を、以下の〈表３〉に示す。

〈表３〉

語	漢字表記 用例数 (a)	かな表記 用例数 (b)	漢字 / かな表記率 b ／ (a ＋ b)
という（繋辞）	6	2008	0.997
ということだ	20	1433	0.986
というものだ	1	133	0.993
というのは （接続詞的用法）	6	84	0.933
かといえば （接続助詞的用法）	31	57	0.648
かというと （接続助詞的用法）	11	103	0.904
なんという	19	361	0.95
いわば	49	285	0.853
いうまでもない	29	63	0.685
いわんばかり	14	19	0.576
cf.　いう	238	221	0.481

本稿で扱った上記の 10 語について言えば、いずれも本動詞用法におけるかな表記率を上回っている。機能語化・イディオム化した際にかな表記率が上昇するという傾向は、確実にあると言ってよいだろう。

一方で、これらの語彙のかな表記率が高いといっても、必ずしもその高さはひとしなみでないということも分かる。かな表記率が 99% 前後まで高いものから、6 ～ 7 割にとどまるものまで、一定の幅が存

Hosei University Repository

する。例えば現在の標準的な文章で、繋辞の「という」を漢字で表記してしまえば不自然、さらに言えば不適切に近い印象を持たれることがあり得るのに対し、「いわば」「いうまでもない」「いわんばかり」等であれば、漢字表記を行っても不自然であるというところまでは行かないように思われる。もとよりこのような表記の自然さは連続的なものであるが、逆に言えば、連続的でクリアカットに二分できないからこそ、このような量的調査が有効であるということにもなる。

5　まとめ・今後の課題等

以上、大変小規模であるが、動詞「いう」を例に、その派生語・周辺語彙と比較する形で、漢字 / かな表記率についての調査を行った。結果をまとめると、

a　今回対象としたコーパスにおいては、本動詞「いう」のかな表記率は 4 割～ 5 割程度である。

b　複合動詞前項における「いう」（「いいあらわす」の「いい」の部分）は、派生形式であるにもかかわらず、本動詞用法の「いう」よりかな表記率が低い（漢字表記率が高い）。

c 「いう」から機能語化・イディオム化した語は、総じて本動詞用法よりもかな表記率が高い。ただしその高さは 99％前後になるものもあれば、6 ～ 7 割にとどまるものもある。

本稿では、「いう」とその周辺語彙における漢字 / かな表記率の、それぞれの実態をある程度明らかにすることはできたが、それぞれの語が異なったかな表記率を持つ要因についてはほとんど踏み込めなかった。例えば、本動詞について言えば、語の長さ（短い動詞の方がかな表記率が高いというような可能性）、同音異義語の有無（有力な同音異義語があると、紛らわしさを回避する傾向が高まり漢字表記率が上がるというような可能性）などが、関与要因の候補として上がりそ

Hosei University Repository

うであるが、今回はそれぞれの要因が本当に関与していると言えるのか、また、それぞれの要因の寄与率のようなものを計ることは可能なのか、等については全く踏み込めなかった。機能語化・イディオム化によるかな表記率の上昇についても、上昇率の差を生む要因として、機能語化した場合に行き着く品詞の違い、本動詞の意味素性の何かがいくつか失われているか、というようなことが考えられるが、これらについての検証も叶わなかった。いずれも今後の課題となる。

資料についても、今回対象としたコーパスは時間幅が広く、近代初頭から昭和後半までの作品が含まれている。今後はこのような資料の質的問題も改善していきたい。

参考文献

小野正弘 2002「使用高頻度漢字の歴史的推移と基本度」『日本語の文字・表記研究会報告論集（石井久雄 , 笹原宏之編）』国立国語研究所

甲田彰 2006「科学技術文献検索システムにおける異表記対応について」『ディジタル図書館』31

三省堂編修所編 1996『 三省堂漢字表記便覧』三省堂

武部良明 1979『日本語の表記』角川書店 ,

武部良明・加藤彰彦編 1989『日本語の文字・表記』上・下（『講座日本語と日本語教育』 第 8・9 巻）明治書院

築島裕 1981『仮名』（『日本語の世界』5 ）中央公論社

當山日出夫 2002「情報処理教育を通じて見た現代の学生の漢字や表記に関する意識の一端 」『日本語の文字･表記 : 研究会報告論集（石井久雄 , 笹原宏之編）』国立国語研究所

林四郎 1977「漢字研究の一視点」『文藝言語研究』2

森岡健二・柴田武編 1975『日本語の文字』学生社